新　刊

□**Lichens-Lecanorales 2, Parmeliaceae**（Flora of Australia vol. 55） xviii＋360 pp. 1994. ABRS（Australian Biological Resources Study), Canberra, Australia. ペーパーバック 48.75 Australian $, ハードカバー 65.00 Australian $.

本誌68巻5号で紹介したオーストラリアの地衣のマニュアル 'Lichens-Lecanorales 1' に続くもので，オーストラリアでは最も重要な Parmeliaceae（ウメノキゴケ科）がとり上げられ，この科に属する26属，386種について，前巻と同じスタイルで属，種の検索表，主な文献，シノニム，タイプ標本，記相文，分布，代表的な標本が記録され，巻末には各種のオーストラリアにおける分布図がある．Figs. 1-32および61-92の8葉のカラープレートも素晴らしいし，Figs. 33-60および93-106の白黒のプレートも鮮明で，図鑑としての機能も充分に果たしている．本書でとりあげられた26属のうち *Anzia*（アンチゴケ属），*Cetraria*（エイランタイ属），*Pannoparmelia*，*Pseudoephebe*（タカネゴケ属）の4属を除く22属については J. A. Elix が執筆している．Elix は本来有機化学が専攻であるが，1970年頃から地衣成分とともに地衣類とくに広義のウメノキゴケ属の分類に取組み，多数の新種を記載し，いくつかの新属の提唱にも関与してきているので，本書の著者としては最適任者である．オーストラリアのウメノキゴケ科のなかの最大の属は *Xanthoparmelia*（キクバゴケ属）で150種を含み，これに次ぐものとして *Parmpotrema*（ウメノキゴケ属，34種），*Paraparmelia*（オワリウメノキゴケ属，38種），*Neofuscelia*（25種），*Hypotrachyna*（ゴンゲンゴケ属，16種）などがある．なお，オーストラリア（ニュージーランドを含む）特産の属は *Chondropsis* だけである．

（黒川　逍）

□レッドデータブック近畿研究会（編著）：**近畿地方の保護上重要な植物**　121pp. 1995. 関西自然保護機構（〒558 大阪市住吉区杉本 3－3－138 大阪市立大学理学部動物社会学研究室気付．電話 06－605－2607．振替口座 00990－2－16679）．¥2,500（送料共）．

絶滅危惧植物の指定のとき問題になるのは，日本全国規模で指定できるものはもちろんあるけれど，地域による量的な差が著しい場合には，かえって指定する意義を軽く見られるおそれがあることである．とくに，このリストが環境影響評価の基礎資料として利用されるときには，地域の現状に合わない基準を押しつけ，評価を誤らせる心配がある．だから全国レベルの調査にばかり頼るのではなく，地域ごとにきめ細かな見直しが必要である．環境庁の全国調査に際して，それが地域の人達にも役立つようなやり方をとるようにとの意見が委員会で再三出されていたが，最近では不満足ながらそういう配慮がされるようになってきた．

本書はこれらの点をふまえて，近畿地方の若手研究者が，専門家アマチュアを問わず協力して行った調査結果の成果である．村田　源，瀬戸　剛両ベテランの永年の知識と経験の披露が，その軸となったとのことである．リストの対象となる植物の選定法はとくに目新しいものではないが，やはり地元だけあって生育環境を細かく仕分けして丹念な調査が行われ，貧栄養湿地，カヤ草地，里草地，岩場，水田など15区分について現状が述べられている．とくに何気なく開発されやすく，フロラ的にも軽視されがちな，人為の入った低地の現状について，意識的に情報を多く集めている．これに加えて府県別にまとめた状況が記述され，これらを総合した表が，巻末に示されている．保護を要する植物として，862種がリストアップされているが，この数はレッドデータブックの全国版のそれに匹敵する．他県で進行中の同様な調査を垣間見ても，似た傾向が認められる．ということは，地域ごとにこういう調査が行われれば，保護対象種の総数は非常に大きいことを意味する．

あとがきでは環境アセスメントについての編者らの意見，提言がなされており，この種の仕事にかかわる者の心構えとして有用である．現在行われている環境庁の調査に巻き込まれている各地の人達が，ただデータを提出するだけでなく，自分達の作ったデータを独自に生かすにはどうしたらよいかを考える参考になるだろう．きめ細かな保護対策や環境影響評価のためには，こういうもの

がなくてはならない．　　　　　（金井弘夫）

□清水敏一（編）：**小泉秀雄植物図集**　251 pp. 1995. 小泉秀雄植物図集刊行会．￥7,000（送料不要）．

小泉秀雄先生の遺品の中に，多数の植物図があることがわかり，このたび没後50年を記念して，故人の職場であった共立女子薬専の関係者等の協力により刊行された．編者は登山家で，大雪山に「小泉岳」と呼ばれるピークがあることから，山名の由来をたずねて小泉先生にゆき当たったとのことで，「大雪山わが山小泉秀雄（1982），同続編（1984）」の著作がある．今回の出版は，清水氏の努力によるところが大きい．また刊行会代表の矢武三知氏は先生の教え子である．

小泉秀雄先生の詳細な図は夙に知られているが，本書の図はそれに輪をかけている．どれもがB5版に4枚（ときに3枚）の図を配置し，部分図までも切り貼りの跡が全くない描き下ろしである．シダや裸子植物もあるが，イネ科，スゲ属，タンポポ属が最も多い．先生は遠大な計画のもとに，図鑑の制作を意図しておられたのだろう．それにしても，仕上がり寸法の図を，融通のきかせようもない頁単位に作って行くというおそろしい計画である．金井は原図のコピーを見せられたとき，ゲラ刷りではないかと疑ったものだが，先生の講義を受けた水島によって，直筆の図であることが確かめられた．ただ，植物名など僅かなメモが付記されているだけで，図の説明はなく，種類も限られているので，散逸しないようにと記念出版にしたものである．130頁にわたる図のほか，植物名目録，著作論文一覧，略年譜があり，アルバムと関係者の回想記がついている．スプリッターとして知られる小泉秀雄先生の見解，詳細な観察眼と描画力を知る上で有用な資料である．この点からすると植物名目録は，検索を目的としたものが望ましかった．また原図の植物名のメモの読み誤りが散見されるが，これは近く正誤表をつけるとのことである．本年6月に刊行されたが，先生の命日に合わせて出版日付は1995年1月18日となっている．

小泉秀雄先生は京都大学名誉教授小泉源一氏の実弟だが，家庭の事情で兄は大学へ進み，弟は農林高校を中退せざるを得なかった．独学と検定によって教員免許を得，のち共立女子薬学専門学校教授となられたが，1945年胃癌のため亡くなられた．この間，1911-1920年を北海道各地で，1920-1933年を松本ですごし，寒地植物の詳細な観察による膨大な資料を蓄積された．ことにタンポポ属，オトギリソウ属に関心をもたれ，新種の記載をされた．標本の多くは国立科学博物館に入っている．また松本時代には横内斎氏はじめ，多くの在野の植物研究者を指導し影響を与えられた．連絡先は次のとおり．〒068 岩見沢市緑が丘 5-166（Tel 0126-23-4570）清水敏一．代金は後払いでよいとのことである．なお，木村敏朗氏から清水氏への私信によると，タンポポ属の図は昭和10年頃の本誌に掲載されたものだとのことである。

（水島うらら・金井弘夫）

□清水建美・梅林正芳: **日本草本植物根系図説**　262 pp. 1995. 平凡社. ￥15,000.

双子葉類・単子葉類の212種について，根の形態を詳しく図説したものである．従来見過ごされがちであった地下部の形態を，克明に観察し記録したものである．根気のいる大変な仕事である．根は水分や栄養の吸収，また一部のものでは翌年の生活のための貯蔵器官でもあり，植物の生活の一部を担う重要な器官である．ひとつの属や近縁の属での根の違いは，それぞれの種類の生活の反映であり，進化の道筋を示しているものでもある．こうした観点から根の形態をたどると，面白い結果がでてくるのではないかと考えられる．ここに載せられたのはごく一部の種類でしかないが，ここでの観察のしかたを基礎にして今後の発展が期待される．

本書は見事な図が大部分を占めているので，図鑑として見られがちであるが，最初の30頁に渡って根系の解説がある．地下茎も含めた根系の定義にしたがって，どのような形の根系があるか，根系を構成する各部分はどのように呼ばれるかなどの詳しい解説がある．根や地下茎についてこれだけの詳細な説明は，今までの教科書には見られない．また巻末に根系の分類の仕方が事細かに載せ